第81号　（50円）
昭和57年9月25日

内　容

経験科学の創造に向けて……1～2
第3回大学院共同セミナー……3～4
第4回大学合同セミナー……5～7
昭和57年度教育プログラム
　三委員会の発足……8～9
新旧理事長が交代の挨拶……9
事業部だより……10～11
わたしたちの合宿……11
千人会……7
利用状況……11～12

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発　行
財団法人　大学セミナー・ハウス
≪所在地≫
東京都八王子市下柚木（〒192-03）
電　話　0426-76-8511～3
振替口座　東京 5-74590番
編　集
大学セミナー・ハウス
企画室
編集人・中川秀恭　発行人・岡山猛
製作　中央公論事業出版

第3回大学院共同セミナー
主題講演から

経験科学の創造に向けて

専修大学教授
内田義彦

学問は、人間の知慧の輝かしい分身です。そして経験科学は、学問のそのまた分身・輝かしい末子です。それは、もともと人間の知慧の一部として、知慧によって生まれ、知慧で育まれて知慧そのものをいっそう豊かにしながら生長し、それを生み育てた人類の知慧に――人間という存在そのものに――万人欽仰の光彩をそえるはずのものでした。はずでしたし、じっさいにもまた、そういう面が文明の底流にあったことも事実でありまして、少し前までは、そういった側面だけが一面的に意識され強調されて、現状謳歌の声ともなり、また歴史をみる眼にも反映して、科学の進歩を軸とする楽天的な文明発展史観を作り上げていた、といえましょう。

もちろん、その間にも人間について、社会について、歴史について鋭く深い反省がありましたけれども、その「反省」の基礎には、安易な科学信仰と、これに結びついたこれまた安易な人間讃歌が、反省らしい反省もなく、すえられるのが常でした。被創造物の一部・その末子でありながら特別の使命をうけた唯一の創造主体、おしなべての被創造物の自然で当然の支配＝管理者人間という誇らかな意識と自負の念は、「文明の輝かしい末子であって諸文明を支配・管理し文明を完成するもの」としての近代ヨーロッパ文明という、ヨーロッパ人のそれと相呼応し相互増幅をとげたもののように思われますけれども、そうした、近代ヨーロッパ人の誇らかな意識と自負の念を根にもった〝自然支配〟の思想は、そのまま自然の合目的的で有効な〝管理〟の思想として、ヨーロッパを超えて、歴史意識の、いや、およそ人間的自覚が行われる場合の普遍的なものとして流布され受容されていました。

「自然は、人間によって――人間を俟ち、人間によって初めて、豊かに――完成される（はず）」――というほどのことを、いまから約一世紀半前、「疎外」という観点によって現に――資本主義とともに――起こりつつある事態を凝視し、その解明と打開のために経済学の研究に身をうちこみつつあった若いマルクスはいいましたけれども、含蓄の深いこのことばは、つい最近まで、そこに含まれているところの、われわれ人類が当面する課題（問題と当為）の大きさに読者を戦慄させ、たじろがせることもなく、気楽に読み流されておりました。

しかし、いま、われわれの眼を打つのは、まったく逆の局面です。

学問、なかでも科学は、じっさいの歴史の上では、とくに、それが発展らしい、顕著な発展を遂げた近代ヨーロッパの歴史に即していえば、生みの親たる人間の知慧とひたすらに手を切る形で確立し発展してきました。手を切るだけではなく、むしろ、それを正面から無視することを科学論によって裏づけされた学者当然の行為としてきましたし、また、結果としても、豊かなはずの人間の知慧そのものをむしばみ、損なうかたちで発展をとげてきました。

「科学の方法」は「経験による方法」ともっぱら対立的にとらえられます。当該の科学特有の、それぞれの立場・目的に応じてそれぞれに定義づけられた専門学術語の統一的な使用は、経験科学に特有でその有効性を保証するものでありますけれども、その専門語が、お互いの専門外の素人が日常用いる言葉（日常語）と完全に縁を切り、それが学問の世界に入りこむことを意識的に断ち切るかたちで、――あたかもそれだけで、そしてそれによってのみ、〝事物そのもの〟の学問的に正確な考察と把握＝統御が最終的に保証されるかのように――排他的に採用されます。しばしば無批判的、無自覚的に。習慣として。

われわれ社会科学者は、むつかしい専門学術語をならべたてるくせがありますが、あれは、患者を前にしてお医者が仲間同士よくラテン語かあやしげなドイツ語（？）を使うのと同じで、学術語を交えた一種のジャーゴン（隠語）なんですね。仲間うちの合言葉。それを使うことで専門家集団の一員であることを示し、それに通じていなければ、それだけで素人として無視、軽蔑されるのがジャーゴンの特質ですけれども、学術語（むしろ学者用語）がそういうものとして習慣的、無意識的に使われる傾向があります。

難しい専門語をならべたてた論文でも、「学術語」がかもし出す「学問的雰囲気」にごまかされずに、いったいこれは何を学問的に明らかにしようとしているのか、その内容と主張を、〝言葉そのもの〟を手がかりにして聴きわけようと努力をしてみますと、使われている「学術語」が、どの程度、学問的に解明すべき問題にまさしく対応する必要で妥当な用語として自覚的に一貫して用いられ、本当に学術語として機能しているか、怪しい場合が多い。

いま、学術語という言葉を使いましたけれども、学問はいろいろな分野や立場に分かれておりますので、学術語といってもじっさいには、それぞれの分野や立場に応じた専門学派の言葉として使われます。何とか派の学者には何とか派独得の学術語があるわけですね。学術語一般ではなく、何とか派に共通の専門語として。その何とか派独自の専門語は、その派独自の視角によってものを見とどけうる機能をもっているかぎり同時に学術語であるわけですけれども、学者は、その派特有の専門学

術語を、ジャーゴンとして、無意識的に使う。それで、われわれ素人には、チンプンカンプン、いっそう分からなくなるわけです。

用語だけではなくてじつのところ内容そのものが——局外の第三者が論理のすじを通してみると——チンプンカンプンで学術のていをなさないはずの論文が、学者らしい難しい言葉で書かれているという理由（だけ）で立派に学問的業績として通用するし、逆に、易しい言葉を交えれば、それだけで学術論文としての価値が疑われるといった現象は、何としてもおかしい。本来、社会各層の言葉のジャーゴン性を打ちやぶって会話に共通の場をつくり、それぞれの経験を共同の経験にまで深める任務をもつ共通語であるはずの学術語が、それ自体ジャーゴン化し、諸学派の学者で、学問の名で実はその派のジャーゴンの通用範囲をめぐって相争うという事態になっている。

堕落もいいところで、それについては日本に即して追求しなければなりませんが、ではこういった現象が完全に日本限りかというと、そうではない。

学術語のジャーゴン化といった堕落を可能にする要因が「正常な」場合にも〝伏在している〟ことを、われわれ経験科学に携わり真にその有効な達成を念願するものとしては、見逃せません。

〝経験〟科学と称してはいるものの、その「経験」は、その実、それぞれの専門学者集団がその方法に従って遭遇する経験でありまして、科学の外に置かれた一般の人々が日常身をもって経験するところのそれではありません。むしろ、経験科学者のいう経験は、素人の日常経験を〝そのものとしては〟完全に無視して——事実上、軽蔑しえたところに——成立するものでありまして、日常経験との触れ合いについていえば、専門の学問固有の方法によって感知され消化されえたものだけが、経験として認知されるに止まります。

大病院の門をくぐって専門医におずおずとその深刻な悩み・症状をきいてもらおうとしますと、その都度、たちまち、むかし、たとえば江戸時代にお役所でお役人相手に罪の無実をうったえるのはどんなに難しかったろうかをあらためて思い知らされる思いをするのでありますが、これは近代医学に限りません。お互い専門外の素人が日常経験する事実が経験科学者によってどう処遇されるか、〝経験科学〟の名による日常経験の無視・軽蔑は、それぞれの生活現実に即して、日毎いやというほど経験させられることです。

痛い、と悩みをぶつけても、痛いはずはない、神経だと一喝されて術もなくひきさがるのと同じ思いを、たとえば農民は、近代科学を背負った農政当局者によってさせられます。

ひとごとではありません。もっとも人間くさく、日常経験にもっとも近いはずの、そしてそのことを意識しているはずのわれわれ社会科学者も、ふりかえってみるとそうです。学問探求の名において、生活現実に即した日常経験と手を切り、つまりは事実上これを軽蔑して、もっぱら学問の世界に閉じこもる。専門の学術に日夜けんさんを重ねるうちに、次第に知慧を失い、ものを見とどける眼と才覚を奪われて、生活現実の上ではまことに見すぼらしい経験の所有者となって人をひきつけるに足る話術のみか〝話題一つ〟持たぬ事実にふと気づかされて呆然とする——あるいは呆然ともしない——のが常だ、とまではいいませんが、そういう絶対的な法則が強く働いていてそこから逃れることは至難のわざ、ということを意識させられます。

もっぱら学者集団によって進められる「経験科学」には、現実との対応・フィードバック関係に、こういう問題性をもっているわけです。

こうして科学は、人間の知慧を軽蔑しこれをむしばむかたちで知慧そのものから離れて、自己増殖をとげてきました。そして、いま、人間と地球の存続そのものが危くなってきていることは、御承知の通りであります。

こうした危機を近代資本主義とその文明は招来したのでありますけれども、その危機は、それを糊塗し、あちこちの点で応急の補修作業をする、といったことではとうてい避けられないでしょう。徒らに事態を嘆いて昔をなつかしむことも同様です。現に地球に住んでこういう事態にとりまかれているわれわれ人間にとって必要であり可能なことは、これを逆手にとって、危機そのものを新しい文明創造の場にすることです。それ以外に道はありません。

いま問われているのは人間の知慧です。そして、いま求められているのは、人間の知慧を真に知慧たらしめるに足る有効な学問の創造です。なかでも、人類の経験すべてを汲みあげ目的に向かって動員しうる知慧才覚と技術を——天才者だけにではなく、われわれ、並みの人間にも努力するかぎり修得可能な形で——与えてくれる真の経験科学の創造を——と、経験科学に携わる一人としては、つけ加えましょう。自負の念からではなく責任として。

科学者集団の誇らかな自負の念からすれば、経験科学は現に、素人の知慧と経験を見下しうるほど発展をとげているかのように見えますが、科学者がいま負うべき責任から見れば、人類が、いま、さまざまな局面において当面している個別的、具体的な事態を有効に捕捉し解決しうる科学としては、ようやくこれから一歩を歩みつつあるその段階にあるにすぎません。

経験科学によって経験は客観的な伝達が可能になりました。その限り、修得は誰にでも——約束にしたがって努力するかぎり——容易になりました。各人がいちいち追体験・追実験をしなくても、学説に通じることによって、ためされた経験をうけとることができます。すべての人が、たとえばアリストテレスの知慧をもたなくてもその学説の誤謬は容易に——ほほえみを交えて——批判することができます。経験科学によって経験の客観的伝達の可能性が保証され、だから進歩が可能になる。が、ここにその落し穴がありまして、経験科学の「経験」が人類そのものの経験といかにずれているか、学者集団によって進められている「経験科学」には現実との対応・フィードバック関係に問題があること、申し上げてきた通りであります。

お互い、危機を生誕の場にする他ない創造現場にある人間の一人として、有効な社会科学の創造に努力しましょう。

日本の教育システムでは、成果としての学問の——「能率的」な——伝達に追われて、一人の創造主体として学問創造の仕方をじっくり修得するという作業の錬修を怠ってきております。ところが、創造の過程でみますと、創造の結果を後からみるのとは、同じことでも違う側面が現れてくるのでありまして、一個の創造主体として創造現場に立って考えると、学校で教わったことは、そのままでは間尺にあいません。方法論についてもそうで、創造現場に立って、さてどうやるかという形で勉強をしないと、方法論は役にたたない。「創造現場の社会科学——学問方法論の具体化をめざして」という題をつけたのは、そういう理由からであります。

講師の伊東さん、山之内さん、佐和さんは、専門も立場も違いますが、どなたもそれぞれ、創造の現場に立って、経験科学としての社会科学の創造に力を尽くしてこられた方です。どうか、短い時間ではありますけれども、その方について——皆様御自身も創造現場に立つ社会科学者の一人として——創造の仕様・仕方を学んでいただきたいと思います。

（注記。これは第3回大学院共同セミナーの「主題講演」のうち、序にあたる部分で述べたかったことを、敷衍したものです。）

第3回大学院共同セミナー

主題＝創造現場の社会科学

――学問方法論の具体化をめざして――

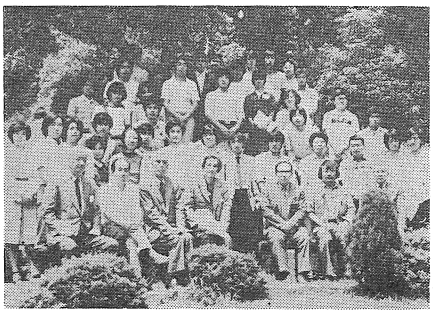
期日――昭和57年7月2～4日

＜主題講演＞
専修大学教授　内田義彦氏

＜セクション演習＞
A　現代経済学と現状分析のはざまで
千葉大学教授　伊東光晴氏
B　疎外論を考え直す――マルクス・ウェーバー・パーソンズ――
東京外国語大学教授　山之内靖氏
C　社会科学のリアリティーとは――方法としての近代西欧そして現代アメリカ――
京都大学教授　佐和隆光氏

＜運営委員＞
伊東光晴氏
山之内靖氏

＜参加学生＞38名（内女子8名）
東大（6）、千葉大（5）、専修大（4）、慶大、東京学芸大（各3）、中央大、早大、横浜国立大、一橋大（各2）、立教大、日本女子大、横浜市立大、青山学院大、東京外大、ICU（各1）、その他（3）、合計15校



◇

第1回の「諸学の系譜と真理愛」、第2回の「心とからだ」につづく大学院共同セミナー第3弾企画として、社会科学の方法論をという提案は早くから共同セミナー委員会に出ていたが、内田義彦氏はじめ指導教授諸氏の熱意あふれる協力によって終始充実したセミナーがここに実現されたことは幸いであった。

社会科学は傷ついたという考えがある。かつてその「科学性」を誇り、また現実との緊張関係において、その有効な政策志向性をもって若い知識層を魅了した社会科学がその傷をはねのけ、再びその魅力を取り戻しうるためには今何が必要とされるのか。その方法論の具体化を、学問創造の現場からめざし合い試し合いたいというのが今回のテーマの主旨である。

開講にあたって伊東光晴氏が講師紹介で述べられたとおり、戦前多くの俊秀を集めた思想史、経済学説史学界にあって、ついに傷つくことなく、その独創的な研究を一貫し通され、学界の雄として知られる内田義彦氏、マルクス理論に沈潜しつつ、その最底辺からの掘り起こしによって真の学問体系再構築への努力を営々と続けられる山之内靖氏、柔軟な姿勢と貪欲なまでの学究心をもって、近代経済学の昨今のはげしい方法論的変転の中から明日への前進を求めてやまない佐和隆光氏、そして身をもって理論と現実分析のはざまで経済学の有効性を立証されつつある伊東氏と、それぞれ学問的立場と個性を異にするこの四者が日頃の造詣を開陳し、また論議を交わされるのである。学生諸君にとって何よりの知的饗宴というべきだろう。とくに内田氏は長らく病気静養中のところ、特別のご好意から参加、周囲の気づかいをも退けて一泊二日、学生諸君の前で議論を共にされたのである。ここにあらためて心からの謝意を表したい。

◇

第一日、飯田名誉館長、伊東運営委員による挨拶のあと、内田義彦氏の主題講演が一時間余にわたり行われた。病後の痩身を椅上にいたわりつつ、一語一語を吟味して、学問することの意味とマナーの伝承を説かれる氏の表情からは、この道一筋に生きるが故の精神の安らぎと同じ学究を志す若い世代へのおのずからの愛情が感じとられ、一同の心を深く打つものがあった。（内田氏のご好意により、主題講演の序論にあたる部分を特にご執筆いただき、フロントページに掲載した。）

夕食後は同じく大学院セミナー館で、佐和・山之内・伊東の三氏による講話が行われた。各氏それぞれが明日からのセクション演習にかかげたテーマについての問題提起である。三氏三様、個性ある講話が聴衆を魅了、予定時間をはるかに越え、散会したのは23時に近かった。以下、順を追ってその要旨を紹介する。

◇佐和隆光氏――

経済学を専攻してから二〇年、「経済学とは何だろうか」という疑問がたえず頭を離れなかったけれども、最近ようやくそのいくらかが氷解してくる思いがする。七〇年代のアメリカで学んだ経済学界の現状は、まさにこの二〇年間に学界が経験したはげしい変転の様相を実感させた。自然科学、とりわけ物理学をモデルにして、人間行動の数理解析をめざすのみならず、所与の社会目標を達成するための政策をも理論的に導き出すことを意図した六〇年代の近代経済学が、七〇年代には早くも内部批判にさらされ、「経済学の第二の危機」を招かなければならなかったのはなぜか。そこには「科学」といえども時代や社会の「文脈」、その価値観との相互依存関係から脱却することはありえないという厳然たる事実が読み取れる。

そうした事実をアメリカと西欧の経済学の変転の中に具体的に検証することにより、社会科学におけるリアリティーの意義と可能性を究明する一つの手がかりを模索したいというのが今日の私の意図であり、私見としては、一方では古典的ユートピア政治経済学を頭に置きながら、他方で新古典派の培いつつあるピースミール・エンジニアリング的方法の積み重ね、その両者間の葛藤の中から新しいパラダイム（範型）創出の可能性を見出していきたいと思っている。

◇山之内靖氏――

現代、一般的に言って、グランド・セオリーへの期待感がきわめて薄いのは事実だ。こうした一般の体系性への疑惑により現在、自信喪失状態にある社会科学に対する立場には二つのものがある。一つは今一度体系性の再建をねがう立場、一つは体系性喪失をテコに身軽な方向転換を採る立場。私はなんとか前者の可能性にかけたい。

「資本論は一体何だったんだろうか」というのが私の年来の問いである。資本論は今でも特に経済史の研究者には豊かな示唆をもっている。そしてマルクスにおける歴史学的方法論と歴史を貫通して見られるとする人間論的領域の、この両側面の関係をどう捉えるかがマルクス研究のカギであり、そこにウェーバーの歴史に対するペシミズムもかかわって問題になる。

ここで私はマルクスとウェーバーを結びつけることによって現代社会の特質を解明しようとした思想家ルカーチに注目したい。かれの著作『歴史と階級意識』（一九二三年）その他にはドストエフスキーの影響が濃厚にあり、市民社会の人間を物象化の中にトータルに囚われた意識の囚人と見る。そして、かれらに方向性を示すものとして出てくるのがウェーバーの「カリスマ」に代置しての「党」である。ここには丸出しのスターリン的党絶対主義があり、また危険なウェーバー像があって、ルカーチ自身、その克服に苦闘した。その結果の著作が『若きヘーゲル』（一九三八年）だが、ここで

重点に置かれているのはヘーゲルにおけるアダム・スミス評価であり、これは本著執筆の動機となったマルクスの『経済学哲学草稿』(第三草稿)の論旨と密接につながるものに思われる。

このドストエフスキー的ルカーチとスミス的ルカーチのどちらが正しいのか、私自身が目下精神分裂的な状態に追い込まれているけれども、ルカーチ自身が決着しかねたこの二つの読み方の総合という一見不可能な課題をなんとか可能にしたいというのが、私の昨今の歩みを根底において規定する問いである。そして、その際マルクスの疎外論を、人間の主体性の喪失というペシミズムから描くのでなく、『経哲第三草稿』で書かれるとおり、近代西欧社会の伝統社会からの脱出に見られる人間の明るい可能性とその限界性というものを方法化した科学方法論と見ていきたいのが私の考えである。

◇伊東光晴氏——

私の方法論的立場は何か。一言で言えば、小さな事件の変化を、既存の経済理論を武器にして追いながら、それに対する政策理論をつくり出すこと。実はそれが大きな事件の問題解明につながるという考えだ。そういう立場から現実問題として、エネルギー、成田空港、老後保障、教育等の問題に対処し発言してきたのである。

その場合、二つの方法論が必要で、一つはわれわれが見ている対象が常に歴史的時間の相の下にあるというタテ軸的発想であり、その意味からは現代は均衡的価格の成立を前提とする古典の時代は終わり、やがて来るべき次のある調和ある時代をつくるべくグランド・デザインを準備する時代だとの考えがある。もう一つはヨコ軸的発想で、一言で言えば構造論的発想である。国家や社会による違いの認識ということで、比較経済社会学、比較体制論等の形で現在多くの人が問題にしている領域だ。西欧マルクス主義には文化一元論があり、これを崩したのが構造主義だけれども戦前の日本の講座派はむしろ西欧に先がけてこれをやった実績をもつといえよう。

ハロッドが言うとおり、経済学をやるには事実に関する正確な情報と人間性への深い理解と洞察、強烈なリアリズムと広い常識がなければならない。現実分析のためには、技術学のインチキ性を認めた上でなおかつ技術学を軽蔑せずに、これを手法に導入することが必要だと私は考える。

◇

第二日の午前二時間半をつかって、共通セッションが同じく大学院セミナー館で行われた。前夜の諸講話をふまえ、学生諸君も交じえての質疑と意見の交流が、伊東光晴氏の司会で行われた。大学院共同セミナーの名にかなう密度の高い論議の連続に参加者一同、知的熱気を共にしての数刻であった。午後からはティー・タイムと夕食時をはさんで各セクションに別れての演習がⅠⅡⅢ部合わせて七時間、ミッチリ行われる。そのあと、学生全員が翌日提出のレポート執筆という、やや過重なスケジュールだ。

第三日はいよいよ全体集会。学生選出の議長団司会により、学生代表の総括レポートが各セクションごとに報告される。そのあとは教授・学生入りまじっての自由討論である。まとめ役に当たった伊東教授の、随時ユーモアをはさんでの歯切れのいい弁舌が、巧みに全体を盛り上げ、緊張の中にも一つの和らぎをつくり出していく。

紙面の都合から今その模様を報ずることができないのが残念であるが、最後に、第二日の共通セッションを終えて退館される際、学生諸君に残された内田氏の感想をもって、この記事をしめくくることにしたい。

「三人の講師のお話はそれぞれに大変おもしろかった。多少疲れたけれども、来てほんとうによかったと思う。

今は専門の経済学者だけでなくて、世間一般の人が経済学をわからなければならない時にあるように思う。巨人の時代ではない。そのためには、生半可でない社会科学的常識を身につけた自立的個人が多く出て来ることがまず求められる。

医者と患者にたとえれば、治すのは患者自身だが、素人医学では駄目で、そこに名医の診断が要る。大局的な天下国家のことはさて措き、局部的な個々の条件がつかみにくい点では医者も経済学も同じで、個人的経験より手がない面がつよかったけれども、こうした面でも経済学はかなり学問らしく進んできたと私には思われる。

経済学の場合、文学の場合などと比べて概念やことばのつかい方で的確さを欠くことが多い。どうか諸君は先生方からその点を全面的に修得してほしい。全面的に教わることがあってはじめて、そこから離れることも可能になるのであり、最初から批判的摂取などというべきではない。」

学生諸君がこのセミナーから何を受け、何を学んだかを、次にかかげる一学生のレポートは語る。

なお、今回のセミナーの記録をもとに一冊の本をつくる話が、ある出版社との間に進行中であることを申し添え、この報告を終える。

▩参加学生のレポートから

学ぶことの楽しさ

東京大学経済学部M1　松田東子

この二日間に受けた印象はたいへん強烈、かつ複雑で、今ここで一つの文章にまとめられるようなものではない。ただ、それが私にとって何ともまばゆい刺激の束であったことは確かである。

まず、四先生の情熱に打たれた。日常は、分厚な頁のかげに隠れてあらわには見ることのない、その学問を支える熱情の炎を、まさに眼のあたりにした思いである。そして、ふだんは全く孤独に燃焼しつづけているであろう個別の学究魂が、邂逅したときに散る火花……。創造現場の最も華麗な面を現実に見ることができたのは、大きな喜びであった。

しかしまた、この四先生のこの情熱の背後にあるものが、輝かしさとは全く無縁の、現代社会を圧倒する暗黒の混迷であることをも私たちは思わねばならない。各先生はそれぞれのあり方で、この闇と格闘されているわけだが、その方法には明らかなズレが存在することも事実である。この微妙なズレを半ば感覚的にしろ知ることができたのは収穫であった。つまり自分もまた(不遜にも)同じ闇と闘おうとする者のひとりとして、自らの探りつつある方向を、経済学の動向の中に、相対的に位置づけるための手がかりを得たといえるからである。

その私が探ろうとしている方向は、まだ思いつきの枠を出ていない幼稚きわまりない手さぐりのものなのだが、それが山之内靖先生の提示された方法と、基本的にはほぼ一致することを知り得たことは、私の最大の収穫であり喜びであった。簡単に言うならば、資本論の階級矛盾あるいは生産力・生産関係矛盾によるタテ割の体系を否定し、組織化の進行する現代社会を個と類の疎外の問題として把えようとする方向。認識論的には、マルクスのヘーゲル的観念論を否定し、フォイエルバッハ的唯物論を取り上げようとする方向。タテ割の体系の持つある意味での自動的な社会主義への移行を否定しながらも、現代のこの混迷の深淵からの脱出口を探し求めることを決してあきらめまいとする方向である。

これらの方向への営為が編み込まれた山之内先生の新著は余りにも厖大であり、わが手には余るけれども、今回先生から直接うかがい得たお話の一束一束を手がかりに、これからの学問への導きの糸として読んでいきたいという意欲を、あらためてかき立てられた。内田義彦先生が言われたように、虚心に、である。

学ぶことの楽しさを噛みしめることのできた二日間であった。先生方に心から感謝申し上げたい。

第4回大学合同セミナー
——10大学合同セミナー10周年記念——
主題＝国民国家の再検討

期日——昭和57年6月25～27日

＜講演＞
主権国家と現代
東京大学教授　福田歓一氏
※5月29日上智大学にて講演。

＜特別講演＞
現代国際政治と主権国家
上智大学教授　蠟山道雄氏

＜セクション演習＞
A　米州セクション
上智大学教授　三輪公忠氏
青山学院大学教授　加茂雄三氏
一橋大学助教授　野林　健氏
B　東アジアセクション
成蹊大学教授　宇野重昭氏
明治大学講師　渡辺昭夫氏
常磐学園短大講師　波多野勝氏
C　中東・アフリカセクション
日本大学助教授　浦野起央氏
ソ連・東欧セクション
津田塾大学教授　百瀬　宏氏
神奈川大学講師　中西　治氏
西欧セクション
E　明治大学教授　三宅正樹氏
上智大学講師　佐藤　健氏
成蹊大学講師　植田隆子氏
F　トランスナショナル・アクターズセクション
早稲田大学教授　大畠英樹氏
国際基督教大学教授　横田洋三氏
大阪大学教授　馬場伸也氏
※なお、各セクションで演習補佐をして下さった院生の方々の氏名は、紙面の関係で割愛させていただきました。

＜10周年記念イベント＞
若者は今何を考えているか
特別ゲスト
津田塾大学助教授　草津　攻氏
作家（第7回合同セミナー実行委員）
田中康夫氏

＜運営委員＞
成蹊大学教授　宇野重昭氏
上智大学教授　三輪公忠氏

＜実行委員会＞
委員長・今野敏哉（明大）、副委員長・中島浩幸（上智大）、松本寿幸（早大）、総務・鈴木広英（慶大）、三輪明義（一橋大）、会計・比良雅美（明大）、山崎敦子（津田塾大）、書記・早川理子（ICU）、藤本久美（聖心女子大）、他実行委員14名。

＜参加学生＞ 145名（内女子55名）
明大（26）、津田塾大（23）、慶大（18）、一橋大（17）、早大（14）、ICU（13）、聖心女子大、成蹊大（各9）、上智大（8）、神奈川大（6）、東京女子大、中大（各1）、合計12校。

◇

7大学（慶応、ICU、上智、成蹊、聖心女子、津田塾、一橋）でスタートした合同セミナーが、今年で10回目を迎えた。第1回は昭和48年に第56回大学共同セミナーとして開催され、第4回から当ハウスの手をはなれて自主ゼミとなったものである。テーマは、第1回の「一九三〇年代を土俵として日本の外交を考える」から一貫して国際関係論を軸に展開してきた。学生で編成される実行委員会が運営に当たり、約八ヵ月の準備期間を経て実施されるというように、組織的、計画的に引き継がれ、一〇年の伝統をつくってきた。大学数は当初の7大学から明治、神奈川、早稲田が順次加わり、10大学へと成長したが、一〇年の歩みが絶えることなく続いてきた蔭には、7大学当時の先生方が、合同セミナーの意義を認め、奉仕的に学生の指導や運営の助言に当たってこられたことを見逃してはならない。

◇

第10回セミナーを当ハウスのプログラムの一つとして実施してはどうか、との話が内部で持ち上がったのは昨秋のことであった。関係者の間で検討が加えられ、実行委員会と企画室との間で運営の細部にわたる話し合いが重ねられた。ハウスの第4回大学合同セミナーに組み入れるために、〝オリジナル・メンバー〟の中から宇野重昭、三輪公忠両氏に運営委員の労をとっていただくことになり、二月には第一回の企画準備会を開いて、10周年記念イベントをめぐり相互に意見の交換を行った。

一方、これに並行して学生の間では勉強会の準備が着々と進行した。11月にはテーマが決まり、チーフ会が組織されて、三月には参加者のセクションの振り分けが決定、四月からセクション毎に勉強会がスタートした。チーフは各セクションの進行具合を報告し合いながら、全体のテーマに沿うように学習の方向を調整するとともに、指導教授の指示を受ける、という役割を担った。

◇

プログラムは午後3時の開講オリエンテーションで幕があいた。まず、実行委員長・今野敏哉君が挨拶に立ち、参加者一同に、三日間のセミナーを十分に活用して意義あるものにしてほしい、と呼びかけた。つづいて飯田名誉館長は合同セミナーの成長と発展を喜びながら、ハウスの一〇年間の小史を感動をもって語られ、指導教授の先生方を代表して運営委員・三輪公忠氏が、合同セミナー発足の経緯と今回の共催の企ての意味にふれて挨拶された。

ひき続いて全体会に移り、約二ヵ月間の勉強会の報告がセクション毎に行われ、国家の現状について地域ごとの分析が提示された。

夕食後は、蠟山道雄氏による特別講演が行われた。氏はその中で、現代国家にアプローチするさいに留意しておくべき点として、大要次のように話を展開された。

「国際社会における非国家的行為主体の出現、従来の国家という枠組では捉えきれない国際問題の発生などから、国家は陳腐化したといわれる。しかし、ある時代の要請に国家が対応できなくなったという事態から、国家はもはや不要であるということにはならないだろう。なぜなら、人間が存在するところ必ず国家は必要なのだから。

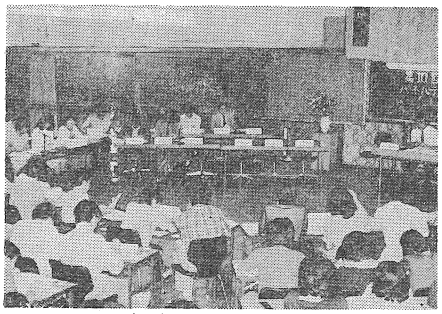
したがって、現代国家を考えるさいの中心的問題は、ある社会の、特定の歴史的時点における要請を、国家という政治的枠組のなかで満足させることができるかどうか、ということになるだろう。」

■パネル・ディスカッション

翌二日目は、午前中にセクション演習が、午後には昼食後、四時間半にわたって、セミナーの中心部分に位置するパネル・ディスカッションが行われた。ここでは次の四つの問題がたてられた。①国家建設の諸問題——近代化および近代化阻害要因、②現代国家の諸問題、③脱国家の諸問題、④超国家の諸問題。

第一の国家建設をめぐる問題について。発展途上国ではいま、自国の独立・主権を維持するために国民経済の成立が不可欠であり、欧米先進工業諸国に一日でも早く追いつかなければならないということから、近代化が急務となっている。ところが、発展途上国では、先進工業諸国が長期間かけて成し遂げてきたことを、短期間のうちに達成しなければならない。その結果として、一部エリートによる強引な〝上からの近代化〟という性格をもっている。近代化の時間的ギャップが国家発展の非同時性を生み出し、国際関係における南北問題の一因となっている。

一方、東南アジアの小型家産性


セミナーの中心部：パネル・ディスカッション

国家、ラテン・アメリカのインディオ、中東のウンマなどの地域に典型的にみられるように、民衆は欧米諸国とは根本的に異なる価値観・政治文化をもっているために、国家権力（一部エリート）の推進する近代化に積極的に協力しようという内発的要求をもっていないことが多い。

このように近代化をめぐる相剋があるにもかかわらず、発展途上国では、軍人＝テクノクラート＝エリートという階層が、強大な暴力装置を背景に民衆を動員するという〝上からの近代化〟が一般的である。こうした諸国では、国家は権力機構的側面、つまり民衆の支配手段として機能している。

第二の現代国家をめぐる問題は、複雑な要素が多いため三つの柱――民族対立、分断国家、主権の問題――を立てて議論がすすめられた。

まず民族対立について。民族対立の主な原因としては、言語・宗教・文化・価値観・生活形態などの違いからくる文化的対立、国内の経済格差からくる経済的対立、中央集権的な国家権力に対する抵抗、国家による差別政策などがあげられる。

さらにいえば、これらの原因の根底には国家の政策決定にさいしての諸問題、つまり、民主制そのもののあり方や国民の国家に対する期待が増加するにしたがって、肥大化してゆく国家とその処理能力の不足が横たわっている。

そうした現実のなかでは、為政者に対する国民の同化を期待することはできない。したがって、為政者は少数民族を抑圧することによってナショナリズムを鼓舞し、ナショナル・アイデンティティを確保しようとしている。民族対立を揚棄するためには、他の民族のもつ独自性を相互に承認し合い、その異質性をふまえたところで国家統合を考える必要があるのではないか、という意見が大勢をしめた。

つぎに、ドイツと朝鮮を中心に分断国家の問題が話し合われた。ドイツの場合、帝国崩壊以降、州境で自主的に戦争責任をとり、東西に分断されたという経歴があり、現在は相互に国家としての独立を承認したうえで友好関係を強化しつつある。朝鮮の場合、植民地から独立したのも束の間、米ソ対立に巻き込まれ、38度線という停戦ラインで南北に分断されたため、常に緊張をはらんでいる。南北朝鮮では、政治的にも経済的にも大きな違いがあり、現段階では南北統一は不可能である。しかし、最終的には統一が望まれており、今後は相互交流がますます必要となってくる。

最後に、主権の問題。もちろん国際法上、主権は平等である。ところが、ブレジネフの制限主権論にみられるように大国の覇権によって侵害されているのが実情である。核の保有は、さらに主権を著しく歪んだものにしている。多国間交渉のなかでも、国家権力はいまなお決定的な意味をもちつづけている。国家安全保障というとき、擬制化された国家は守られるべき対象であるし、軍事力は絶対的な意味を現在なおもっている。

いわゆるリンケージ・ポリティクスといわれる現状は、国内における主権の絶対性をも変質させているし、また国家主権では処理しきれない問題も多く発生している。こうしたなかで、最も望まれることは、国家主権の相互尊重である。単なる主権の相対化は、戦争状態を黙認しかねないが、ある種の主権委譲や相互依存の深化は、国際平和にとって重要であるように思われる。

第三に脱国家について。交通・通信手段の発達に伴う人的、物的移動の拡大、国家単位では解決できないグローバル・イシューの発生などを背景に、近年、NGO（非政府間組織）の活動がさかんである。NGOは、組織の目的により多種多様であるが、その特色は、国家とは違う個人レベルでの自己主張の場であるということができる。

MNC（多国籍企業）にとっては多数国または世界全体が市場なのであるから、国民経済はサブ・システムということになる。MNCも広義にはNGOであるが、それは営利を追求し、独自の企業大国の建設をめざしているということが特色としてあげられる。

MNCは国家から発生したにもかかわらず、超国境的な存在であり、国家に比肩しうる力をもつものも少なくない。また国家の政策決定に介入することさえあり、国家と密接に結びついた運命共同体であるといえる。しかし、MNCは相手国の利益と自らのそれが一致するときには、国家主権を尊重し協力するが、逆のときには、国家主権を侵害することさえある。

第四に、超国家について。今日、世界各地で地域的統合がなされているが、それらに共通していえることは「機能主義的」統合という性格をもっているということである。たとえば、ECの場合には市場の拡大ということが大きな目的となっている。もちろん他にも、独仏戦争の回避、米ソに対抗するヨーロッパの発言力を強化することなども統合の目的としてあげられる。機能主義的統合を考える場合、その背景として、今日国民経済が市場として縮小してしまったという経済事情がある、ということを見過ごすことはできない。

しかし、機能主義的統合は必ずしも順調にすすんでいるわけではない。ECでさえ国家としての発言力の問題、国家主権の制約、国民性の堅持などその統合にはいくつかの限界がみられる。統合がすすむほど、各国の国益に及ぼす影響も大きくなり、国益と統合の相剋が生まれてくる。

■10周年記念イベント

10周年記念の特別企画として、討論会「若者は今、何を考えているか？」が二日目午後7時から9時まで開かれた。この記念イベントには、第1回の実行委員長井上勇一氏をはじめ、OB・OGが十数名出席され、合同セミナーの一〇年の成長を共に祝った。ゲストに、第7回の副委員長で、いまは作家として活躍中の田中康夫氏、社会心理学者の草津攻氏を迎え、若者たちが各人の体験に根ざしたことばで、自分たち自身のことを語り合おう、というのが、この企画のねらいである。

討論に先立って、KJ法による若者像の図表の説明が草津氏からなされた。この図表は同氏の指導で、企画委員が数十時間を費して作成したものである。これを手がかりに次々と出された意見の中から、いくつかを拾ってみよう。

「現代社会の壁に挑戦する前に、自分の頭の中で壁をつくってしまい、とまどっている大学生」「他者との対話を大学に求めた自分」「大学は自分にとって精神的鍛練の場であり、学問する場ではなかった」など。

田中氏は皮肉を交じえ次のような発言をされた。「現代では、洋服やバッグなどのものと同じように、人間もブランド化している。他人とはちょっとちがう自分、というかたちで自分を確認するしかない……。ぼくは前の世代に対するアンチ・テーゼをもっていない人間である。……今の世の中はキモチイイと思っている」と。

参加学生からさまざまな反応があった。「情熱をもってものごとに挑戦していくのが若者だ」「キモチイイというのはいいが、原爆を落とされてからあわてても手遅れだ」という意見。「若者はこうあるべきだなどというのは押し付けがましい」「各人各様の若者像があってよい」という意見。田中氏の意見をめぐって、ときにはエキサイティングな場面もみられ、討論は最高潮に達した。

「自分を見失い、生きる意味がわからなくなっているのは若者ばかりではない。大人も同じである。大切なことは、社会とのかかわりのなかで自分の生き方を考えることなのではないか」というある先生の発言があった。

また、草津氏は田中氏の意見に賛成しつつも、「大学の先生とい

うブランドではとらえきれない自分が残っている」ということを強調された。「現代の大学生は自分に対して自信と誇りを持つべきではないか」という終了まぎわに出たある学生の発言は、一同を大きくうなずかせた。

何もいまさら……というシラケた雰囲気のうちにはじまった現代若者論も、大詰に近づくにしたがって盛り上がりをみせたが、時間の関係でひとまず幕を下した。

◇

最終日は午前中にセクション毎の反省会がもたれ、送別昼食会で三日間の幕を閉じた。総勢二〇〇名に及ぶ参加者（指導教授陣も含めて）を率いてきた実行委員会の見事な組織力と、先生方の温かく時には厳しい指導と助言とが、このセミナーを支えていた、というのが実感であった。

両者がかもし出すハーモニーによって、10大学合同セミナーは次の一〇年に向かって、新たな第一歩を踏み出すことであろう。

10周年記念セミナーを終えて

実行委員長　今野敏哉

私たちの合同セミナーも今年で一〇年目を迎えました。名称も10大学合同セミナー10周年記念とし、運営は大学セミナー・ハウスと共催で進めてまいりました。

今年のセミナーで特筆すべきことは、過去九年間のOB・OGを迎え、10周年記念イベントを行ったこと、そしてセミナーの参加者数が二〇〇名を越え、名実ともに日本一のセミナーになったことです。大学の形骸化が言われる昨今、この10大学合同セミナーは最高の自己錬磨の機会を提供しうるものと考えます。さらに、インターカレッジとしての性格を持つ以上、他大学との他流試合の場でもあるわけです。他大学の学生や先生との討論を積み重ねることによって互いに切磋琢磨され、多くの友人を作り、自己の人間性の幅を広げていけるのが、このセミナーの最大の特徴であると考えます。

ただ問題となるのは、参加者数の増大に伴い、運営上の困難も加わり、勉強会のレベルの低下も生じてきていることです。参加校も10大学が限度だと思われることと、勉強会の運営には一層の配慮が必要であると思われます。

このセミナーで重要な位置を占めていたのが、パネル・ディスカッションです。今年は例年にない成功をおさめたと確信しておりますが、何か一つまとまりに欠けたような気がします。その理由の一つは、自己主張が先に立ち、他の異なった意見を聞く努力が欠けていたからではないでしょうか。多数の意見をまとめることの困難さを痛感しました。

このセミナーが無事成功に終わりましたのも、先生方のご指導、大学セミナー・ハウスの職員の方方、そして参加された方々や各大学の実行委員、チーフ会の方々の熱意によるものです。ここに改めて感謝の意を表したいと思います。

（明治大学政経学部4年）

「開かれた大学」の土壌

――実行委員会の成長を喜ぶ――

常磐学園短期大学講師　波多野勝

一九七三年に始まった合同セミナーが一〇年を迎えることとなった。第2回より参加している私としては、まことに感慨深いの一言につきる。今回は一五〇名余の参加と聞くがその盛況ぶりは驚くばかりである。なんといっても事務当局、すなわち実行委員会の充実がその大きな要素と言えよう。10の大学が物理的にも感情的にも様様な側面を包含しつつセミナー開催にもちこんでいく過程は、国際政治をまさに実践しているようなものである。思い出せばお恥しい次第であるが、我々のころは事務当局を含めすべてセミナー・ハウス側に寄りかかっていた甘さもあってか全体の人数の把握に追われていたきらいがあった。なおかつ、いわゆるパート別研究会なるものも半ば分離独立した形でとても有機的といえる代物ではなく（一方ではパート内のコミュニケーションを促進するという効果はあったが）、一時はパネル・ディスカッションなどやめてはどうかという案さえ噴出したほどであった。そのような過程を経ている我我にとっては、この数年間の充実ぶりに感心するばかりである。これはなにも学生諸君の努力だけではなく先生方や先輩の暖かい目があったればこそでもある。

このような思いを感じつつも、問題となるのはなんといっても合同セミナーの肥大化である。今回のパート研究会では二〇～三〇名の学生が所属していた。確かに大学間の交流は深まったにせよ、逆に先生方と学生のコミュニケーションが希薄になるという危険性を常にはらんでいる。さらに、二〇名余を集めて研究会を開くのは、物理的にむずかしいところにきていると思う。人数が多いとそれだけ個人の責任の所在がぼやけてくる。そこでチーフの主な仕事は研究会活動は当然のことながら、電話連絡、研究会後のコンパに精を出し、パートのまとめに奔走するのである。

政治システムは破壊するのは簡単であるが、これを維持、発展させていくのは相当の努力が必要である。10大学合同セミナーも同様と言えよう。これを一つの区切りとするならば今一度このシステムについて話し合う必要もあろう。一〇年の積み重ねが水泡に帰さないためにもその努力を怠ってはいけない。

◈千人会　昭和57年6～7月

◇現在会員は一、六六三名です

大学人＝一、二四七名
社会人＝　四一六名

◇新しく会員となられた方々

二名〔第65回報告（申込順）〕

C　相模女子大学学生課　落合　明殿
B　慶応義塾大学講師　有末　賢殿

◇会費ありがとうございます

荒川有史、山下肇、島田淳子、板倉譲治、朝野洋一、井早康正、高橋忠次郎、道喜美代、徳末愛子、高橋康之、柴田勇造、竹内喜夫、佐野幹夫、土橋信男、野沢浩、福山直美、古畑和孝、久保田浩、竹内喜代司、佐藤進、藤井耕一、芳野赳夫、和田英一、矢澤大二、田中未来、中山光雄、石井修二、望月継治、福田雄、松崎奈岐、江沢洋、柴田恭二、岡田正弘、大内力、市井三郎、秀村欣二、今道友信、松井源吾、大野泰雄、鶴見和子、吉田幸弘、小畠守生、中村幸安、金子晃、小林弘、武者利光、今井義夫、柳下勇、山崎誠、名東孝二、立入広太郎、中野スミ子、小倉充夫、中島直忠、川島順平、見田宗介、伏見康治、朱牟田夏雄、臼井久和、栗林恒雄、坂野正高、吉松藤子、笹森健、阿久津喜弘、長清子、石川信男、太田秀通、松尾浩也、黒田成俊、柴田政利、厚東偉介、高橋勇悦、柳田博明、緒田原涓一、内山尚三、永井裕、浅川淳、阿部斉、辻達也、宗像元介、村上直、神保信一、高橋公雄、林俊一、西宮輝明、中村哲哉、石井進、三橋文雄、和田義信、領哲之助、栗原尚子、山本襄治、松島恵、慶谷伸代、松平文朗、三浦徳弘、寺沢徳雄、讃岐和家、綿引二郎、榊原祐輔、簗田長世、黒田道雄、川田雄一、中村浩三、柏木恵子、三和治、坂田道太、田島恵児、林泰造、藤平重雄、石川馨、岡沢憲芙、石川達雄、桜井育子、古本捷治、中川一朗、大畑篤四郎、坂本清、松原治郎、小池生夫、詫摩武俊、後藤光一郎、梅沢豊、萩原龍夫、小西悟、山西貞、井出翕、川喜田二郎、福田歓一、橋本智、外山敏子、藤原鎮男、米村貞蔵、鈴木成文、有末賢、太田善磨、三輪公忠、山井湧、小池滋、望月一憲、小川信子、中島文夫、中村進、安藤良雄、吉田美穂子、柴田誠、土田美芳、川合隆男、菊地昌典、川原啓美、小林宏晨、角瀬保雄、長浜洋一、矢部章彦、北野美枝子　（敬称略）

法人ニュース

昭和57年度 教育プログラム三委員会の発足

第1回共同セミナー委員会

昭和57年7月6日／私学会館

本年度は、別記のように七名の新任委員を迎え、再任・留任を加えた二三名で委員会が発足することになった。

第1回委員会は一五名の出席の下に開かれた。議事に先立ち、飯田名誉館長の発議で、当ハウスのモットーに“Plain Living and High Thinking”を選んで下さった故斎藤勇先生の死を悼んで、出席者一同黙禱を捧げた。

議事はまず、中川館長より前年度に引きつづき委員長に岡宏子氏を推薦したい旨の提案があり、全員の賛成によって同氏を選出した。岡委員長は、副委員長に黒田道雄、江沢洋両氏を指名し、全員の賛成を得て承認された。

次に、今年度すでに実施された第119回大学共同セミナー、第4回大学合同セミナーおよび第3回大学院共同セミナーについて、飯田企画室主事、岡山専務より報告が行われた。

つづいて、企画が進められている第120、121回共同セミナーおよび第5回合同セミナーの準備状況の報告が、担当の運営委員小浪、芳野、田中の各氏より行われた。最終的なテーマおよび会期は12頁予告を参照されたい。

次に本年度後半の未定の企画について、昨年6月のユング・セミナーの再度開催の希望が林道義氏より寄せられているので、実施したいという企画室案が主事より出され、了承された。

ついで、主事より資料にもとづいた概略の説明があり、種々の意見交換がなされた。具体的なテーマは次回の委員会で固めることとし、来年度第一回を、故上代たの先生の追悼記念セミナーとすることが決定した。

続いて新旧委員の歓送迎晩餐会がもたれた。旧委員の山岸健氏が出席され、51年に委員に就任、54年から副委員長として卓抜したアイディアを次々と提案して共同セミナーに貢献をされた同氏に感謝の拍手が送られた。

〔昭和57年度共同セミナー委員〕（就任順、敬称略、○印は新任）

＜委員長＞
岡宏子　聖心女子大学教授

＜副委員長＞
黒田道雄　成蹊大学教授

○江沢洋　学習院大学教授

＜委員＞
友部直　共立女子大学教授
板垣雄三　東京大学助教授
熊坂敦子　日本女子大学教授
阿久津喜弘　国際基督教大教授
岡野加穂留　明治大教授
小田晋　筑波大学教授
前田愛　立教大学教授
峰島旭雄　早稲田大学教授
宮田登　筑波大学助教授
阿部謹也　一橋大学教授
尾本惠市　東京大学教授
小浪充　東京外国語大学教授
田中義久　法政大学教授
芳野赳夫　電気通信大学教授
○神吉敬三　上智大学教授
○清水徹　明治学院大学教授
○深海博明　慶応義塾大学教授
○徳丸吉彦　お茶の水女子大教授
○戸沼幸市　早稲田大学教授
○山下幸夫　中央大学教授

第1回国際プログラム委員会

昭和57年6月16日／私学会館

本年度は、二期にわたり改選が保留になっていた昭和54年度委員会から、別記のように七名の新任を迎え、再任を加えた一八名で発足することになり、新委員会の第1回は、一二名の出席の下に開催された。

議事はまず、委員全員の自己紹介から始められ、さっそく新委員会の委員長の委嘱と副委員長の指名に移った。中川館長より中嶋嶺雄氏に委員長が委嘱され、同氏は広野良吉、三輪公忠両氏に副委員長を指名、全員の賛成を得て承認された。

次に、今年度国際プログラムの協議に移り、秋に予定されている第9回国際学生セミナーのテーマ説明が中嶋委員長よりなされた。具体的な討論に入る前に、「国際学生セミナーの発足と経過」の説明が資料によって飯田企画室主事より行われた。つづいて同セミナーの運営委員長に横田洋三氏が出席者全員の同意を得て推され、同氏より運営委員に菊地靖、熊田禎宣、渡辺利夫の諸氏が指名され、三氏の同意を得て、承認された。

つづいて、横田氏から国際学生セミナーの基本的な運営に関して次のような問題提起がなされた。使用言語は日本語を前提としてきたが、外国人学生の参加を促すためには一考を要するのではないか。9月入学の短期留学生のために、英語のみのセクションを設けることの是非。これをめぐって種種の意見が出され、次のような結論におちついた。英語だけのセクションを設けると、語学研修のようなことになるおそれがあるので、留学生が応募の段階で躊躇しないように募集要項の表現を工夫する。必要に応じて英語が使用できる、という程度のインフォメーションがあってもよい。

ほかに、国際セミナー館の活用を促すためにも、小規模の国際シンポジウムなどの企画を積極的に申し出てほしい、という要請が中嶋委員からなされた。

〔昭和57、58年度国際プログラム委員会〕（敬称略、就任順、○印は新任）

＜委員長＞
中嶋嶺雄　東京外国語大学教授

＜副委員長＞
広野良吉　成蹊大学教授
三輪公忠　上智大学教授

＜委員＞
横田洋三　国際基督教大学教授
山代昌希　早稲田大学外事課長
阿部美哉　放送教育開発センター教授
金山宣夫　東和大学教授
小倉充夫　津田塾大学助教授
菊地靖　早稲田大学教授
熊田禎宣　東京工業大学教授
浜西栄一　国際交流基金受入課長
○岡村豊　文部省留学生課長
○片倉素子　国立民族学博物館教授
○庄野克房　上智大学教授
○杉山二郎　東京国立博物館東洋考古室長
○中村英夫　東京大学教授
○山沢逸平　一橋大学教授
○渡辺利夫　筑波大学助教授

第1回大学教員懇談会企画委員会

昭和57年7月5日／私学会館

二年半の準備委員会を経て、本年度にようやく正式の大学教員懇談会企画委員会が発足することになった。委員会は別記のように総勢二四大学二四名によって構成され、一三名の準備委員はそのまま委員に就任した。

第1回委員会は一七名の出席の下に開催された。まず最初に、中川館長の開会挨拶のあと、井早準備委員会委員長より、大学教員懇談会の性格、同懇談会の運営の母体としての常置委員会の必要性が発議されてから今日に至るまでの経過の説明がなされた。

ついで中川館長より「大学教員懇談会企画委員会内規案」の説明が行われ、これをめぐって種々の質問や意見が出された。若干の修正箇所については堀部委員と企画室との間で話し合いの上、修正案を各委員に郵送して同意を求めることになり、原則的承認を得た。

次に、委員全員の自己紹介ののち、委員長の選出に移り、井早康正氏が推せんを受け、全員の賛成を得て承認された。同氏は副委員長に村田喜代治、尾田幸雄両氏を推薦、全員の賛成があり、正副委員長がここに選出された。

つづいて、飯田企画室主事から

新旧理事長が交代の挨拶

昭和57年7月5日

去る5月31日の第50回理事会決定については既報のとおりだが、これにもとづき、去る7月1日、茅誠司前理事長に代わり、中川秀恭氏が理事長に就任、館長をも兼務することになった。

7月5日には茅・中川両氏が早朝のハウスに来館、職員の前に理事長交代の挨拶をされた。

「当初、熱意をもってすれば、セミナー・ハウスの運営はうまくいくものだと思ってお引き受けしたけれども、三年三ヵ月経って今考えてみれば、そういう考えは甘かったようだ。私の軽卒と努力不足を皆さんにお詫びしたい。これからは中川先生を中心にこの丘の運営がスムーズにいくよう、皆で力をつくしてほしい」旨の茅氏の挨拶に対して、中川氏から、ハウス設立以来、とくに困難の多かったここ三年余、茅氏から賜わったご尽瘁への謝辞が述べられた。ひきつづき中川氏からは大要つぎの趣旨の就任挨拶がなされた。

「ハウスには明確な設立趣旨とのものだとして自分の意見を述べてお互いに議論することは極めて大切なことですが、その総括となるものを見極めてそれを自分たちの結論とすることをしないと、かえってお互いが対立することになります。私自身このセミナー・ハウスに来てそのような議論の場を作らなかったことは、まことに申し訳なかったと思い、心からお詫びを申し上げます。

新しく理事長をお引き受け下さった中川先生は館長としてすでに一年余を皆様と過され、その間実によくこの地に来て下さいました。中川先生を中心として今度は皆様方仲善く議論を尽くしてこのセミナー・ハウスを和気藹々たる雰囲気で満して下さるようお願いいたします。

最後に、このセミナー・ハウスの畑でできたさつま芋を味わいましたが、実においしかったので、できた時はまた頂きたいことをお願いいたします。　さようなら。

理事長辞任に当たって
――職員への挨拶――

茅　誠　司

私は昭和54年4月に川喜田さんの後を受けて理事長に就任いたしました。その際セミナー・ハウスに参りまして職員の皆さんに集まって頂いて、こんな意味の挨拶をいたしました。

「これからは皆様はこのセミナー・ハウスを自分たちのものと考え、その運営についてはこのような職員の集まりを開いて、そこで充分意見を出し合って討論し、それを総括して結論を出すという習慣を作って頂きたい」と。

今それから三ヵ年以上の年月を経た今日、私の怠慢からそのような集まりも充分開かれず、職員の皆様の議論も散り散りばらばらの状態から脱し切れぬままとなり、それが職員の皆様の融和を乱してしまったのではないかと思います。セミナー・ハウスを自分たち高い理想がある。学校ではないが広い意味の教育機関である。学問と人間を通しての大学間交流の輪が、今や社会人をも含めて、もう少し広いものに発展しつつある。そうした教育的奉仕のもつ社会的役割の認識の上に立って、ハウスのめざすべき発展は何か、職員ひとりひとりの立場の違い、考えの違いをこえての積極的な話合いと平和な人間関係の確立をはかりたい。」

なお、茅氏から別掲のメッセージが職員に寄せられた。

故上代タノ先生のご遺志
五〇万円を当法人に寄贈

大学セミナー・ハウス設立者の一人であり、終身理事として法人運営にご指導の労をとられた元日本女子大学長上代タノ先生には、去る四月八日ご逝去、九五歳の生涯を閉じられたが、去る五月二一日、先生の遺言にもとづき、金五〇万円が当法人に寄贈された。先生のご厚志に対し謹しんで謝意を表する次第である。

なお、来春には故上代先生の追悼記念セミナーを実施すべく、目下共同セミナー委員会で計画が進められていることを付記する。

●運営委員会の新陣容決まる

去る6月4日、今年度第2回の運営委員会が、中川館長、川原栄峰・宇野重昭両運営委員のほかに、それぞれ共同セミナー委員会、国際プログラム委員会の委員長として、岡宏子・中嶋嶺雄両氏の参加を求めて、ハウス内で開かれた。

当委員会は昭和55年7月の発足以来、加藤一郎委員長以下、川原栄峰・宇野重昭・三宅彰・鈴木皇・崎田直次の六委員が理事長の諮問にこたえ、ハウスの運営とその将来計画などにつき意見具申を行って来たが、加藤氏の委員辞任の申し出のほか、去る5月31日の第50回理事会決定にもとづく三宅・鈴木・崎田三委員の常務理事就任があり、改選期にある委員人事を主たる議題に開かれた。

席上、中川理事長より当委員会の人事ならびに今後の基本方針に関する提案があり、熱心な討議の上、次の諸点が合意、決定された。

①加藤・三宅・鈴木・崎田の諸氏の退任を認め、川原・宇野両氏は再任、ほかに今後、共同セミナー委員会・国際プログラム委員会・大学教員懇談会企画委員会の各委員長は職務上、当委員会委員に加わるものとする。そのほか必要に応じ委員の追加委嘱を考える。今期委員長、副委員長にはそれぞれ川原、宇野両氏に就任を委嘱。

②運営委員会は法人運営に関する意見具申に際しても、本来のスタッフ的役割に徹し、法人の経営責任を直接担う常務理事会とはお互いの役割分担を明確にする。

③会合を定例化し、二回に一回は現場職員との意見交換をはかるなど、事務局と理事者側を結ぶパイプ役としての機能をはたす。

〈資料〉「大学教員懇談会の発足と経緯」により、昭和45年9月の懇談会を契機に、当ハウスの継続的なプログラムとして開催されることになった経緯とこれまでの活動の詳しい説明がなされた。

次に、第19回懇談会の企画について、井早委員長より、準備委員会による計画案「国際化時代の大学」が示され、これをめぐって意見の交換が行われた。運営委員に、村田喜代治、司馬正次、香原志勢、堀部政男の諸氏を選出し、具体的な人選、プログラムはここにゆだねられた。

〔昭和57年度大学教員懇談会企画委員会〕（敬称略、▽印は準備会委員）

＜委員長＞
▽井早康正　電気通信大学教授

＜副委員長＞
▽村田喜代治　中央大学教授
尾田幸雄　お茶の水女子大教授

＜委員＞
井上勝也　千葉大学教授
▽大川信明　東洋大学教授
▽岡嶋道夫　東京医科歯科大教授
▽柏崎利之輔　早稲田大学教授
▽川村亮　東京農工大学教授
▽小池生夫　慶応義塾大学教授
▽小林善彦　東京大学教授
香原志勢　立教大学教授
鮫島達也　青山学院大学教授
▽司馬正次　筑波大学教授
▽下森定　法政大学教授
▽関口利男　東京工業大学教授
田村光三　明治大学教授
徳末愛子　日本女子大学教授
根岸愛子　東京女子大学教授
野村泫　東京外国語大学教授
堀部政男　一橋大学教授
▽三宅彰　国際基督教大学教授
水島義治　日本大学教授
目黒謙次郎　東京理科大学教授
蠟山道雄　上智大学教授

●事業部だより

57年6・7月 初夏のキャンパスから

●6・7両月の概況

異常梅雨で、今年は夏の到来がいつもよりおそかった。しかし、この季節の常連グループは例年どおりこの丘に再来、それぞれにいい合宿をされ、ハウスとのご縁を深めて下さった。4月以降あいついだ各大学のオリエンテーションは7月に入って一段落。ひき続いて夏休みを利用しての各種ゼミ・研修、大学の垣根をこえた全国集会や国際集会を迎え、ハウスは8月にかけて一年中で利用者が最も多い時期となる。

6月の利用グループ数は六八、宿泊延人数は三、五六三人（宿舎利用率四四%）。7月のグループ数は九九、宿泊延人数は六、三八二人（利用率七七%）で、これは同月の開館以来の最多記録である。なお、両月とも、宿泊延人数に占める会員校の比率は六一%であった。

●新入生合宿が終了

6・7両月中に実施された新入生合宿研修でクラス単位以上の規模のものは、別表に示すとおりである。前号（80号）に掲載した4・5月分とあわせ、今年度4月から7月までに実施された大学関係のオリエンテーション（同じくクラス単位以上）は計二八校、四九グループ。参加者数は六、二三五名（うち教職員五八二名）、延べにすると七、七二一名となる。

津田塾大は6月に実施の数学科の合宿で、昨年一〇年ぶりに復活した全三学科のフレッシュマン・キャンプを今春も再現。準会員校白梅学園短大保育科は6月中旬に計三七一名（うち教職員二九名）が前後二班に分かれてともに二泊三日、延べにして七三六名と今年も最大の新入生合宿を実施された。両班がともに中日の日程に組むテニスコートでの〝運動会〟（写真参照）も夜の食堂いっぱいの〝立食パーティ〟も、すっかり定例の行事となった。お茶の水女子大が夏休み開始直前の7月なかばに実施した新入生セミナーが、今年も〝フレッシュマンの季節〟を締めくくった。全一八学科計四〇四名が前後二班に分かれての〝全群使用〟の合宿は、昭和42年以来連続一六回目という同大伝統の行事である。

昭和57年6・7月
新入生オリエンテーション実施状況

大学名	参加者数
●6月	
東京都立大・法学部	128(4)
津田塾大・数学科	119(15)
東京学芸大・数学科	174(11)
白梅学園短大・保育科	*161(15)
白梅学園短大・保育科	*210(14)
電気通信大・物理工学科	44(6)
東京都立大・物理学教室	63(5)
●7月	
お茶の水女子大・理・家政学部（8学科）	216(18)
お茶の水女子大・文教育学部（10学科）	226(20)
計9グループ	1,341人(108人)

（注）参加者数の（ ）内は内数で教職員。* は2泊，他は1泊。
実施順。4・5月実施分は本紙前号に掲載。

●各種ゼミ・研究集会

個別大学の利用の中には、芝浦工大建築学科二年生の恒例「八王子ゼミナール」がある。かつてハウスの共同セミナーの企画と運営に参加された教師が、その体験を学内で生かし、新たに開発した共同セミナー方式の二泊三日の合宿で、今年は「道」をテーマに討論した。これも毎夏の定例行事となった京浜女子大の野外講習会「多摩丘陵の動植物観察」の合宿では、異常気象にもかかわらず蟬の羽化の生態観察もかなえられたという。学習院大の職員研修を迎えるのは今年で三回目である。

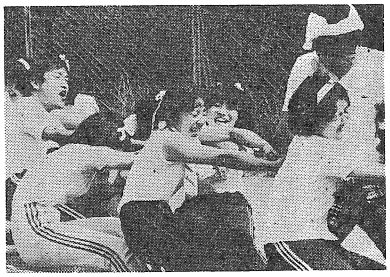
大学の枠をこえた集会には、別掲報告のとおり今年は10周年を迎え、特にハウスの事業の一環として実施された10大学合同の国際関係セミナーや、これもハウス主催の第3回大学院共同セミナー、そして第3回核融合研究集会、当ハウスでの開催が一五回目の大学英語教育学会（JACET）夏期セミナーの一二泊の合宿などがある。恒例化した文部省主催の厚生補導研究協議会では、全国各地の国立大の職員など三十数名がハウスの生活を体験された。

●海外からの利用者たち

海外からの利用者が年々増え、ハウスが国籍をこえた生活と交流の場になることは、うれしいことである。6月から7月にかけてはパキスタン・カラチからの珍客を迎えた。現在日本の協力で同地に建設中の二つの発電所で将来、管理にあたる上級技術者グループの一〇人で、約半年にわたる各地での研修に先立ち、日本語の訓練と生活オリエンテーションで一二日間滞在された。ここでの生活になじんだ一行は、出発の前日国際セミナー館近くにハナミズキを記念植樹されたが、後日研修先の日立市からも、ハウスへの懐しみと感謝をこめた心暖まる手紙を寄せてくれた。

7月中旬には、昨年にひき続き国際交流基金主催の「海外日本語講師研修会」の一行を迎えた。世界諸地域一九ヵ国の大学等で日本語教育に従事している外国人教師五四名で、滞日一ヵ月半の最初の七日間をハウスで合宿、日本語および日本語教授法、日本事情について集中的な研修を受けた。その間、研修生同士の、また他の在泊グループとの、ごく自然な形での交流が随所に繰り広げられたが、特に昨年同様設けられた夕食時の交歓会、遠来荘での茶会、交友館でのパーティなどが、ハウスでの独自の体験として、一同に忘れ得ぬ印象を残したようだ。後日寄せられた研修生たちの感想の一部を、いずれも原文のまま紹介したい（次頁に掲載）。

たまたま同研修生一行の来泊中に、大妻女子大英文科の六七名が恒例の「英語特殊演習」で四泊五日の合宿を行った。前者の外国人研修生が生活も日本語で「日本語特訓」を受けるのとは対照的に、後者は日本語は一切ご法度の、英語だけの生活。食堂のテーブルでは両者が相互に相手のことばで話を交わす珍風景も。そして合宿も終りに近い交友館では、オーストラリアやニュージーランドなどからの研修生を格好の会話相手に、「自分の意思を英語で表現する訓練」の成果を試みる大妻女子大生たちの真剣な表情も見られた（次頁写真上）。本号の「わたしたちの合宿」欄では、一〇年来この「英語特殊演習」の運営と指導に当たってこられた同大隈部直光教授に、その合宿の一端をご紹介していただいた。



白梅学園短大オリエンテーションの〝運動会〟風景（テニスコート）

構内を散策するパキスタン技術者グループ（かやばし）

●交歓プログラムから

6月19日＝週末の夕食時に六グループが交歓。特に初来館の都立大と電通大の新入生グループを歓迎。東理大・建築ゼミの沖塩荘一郎教授が新入生のために当ハウスの建築について解説。

7月16日＝海外日本語講師団と在泊の七大学グループ、計二〇ヵ国・二百余名が夕食時に交流。外国人日本語教師五四名の国籍別紹介につづいて、千葉大・井上勝也教授が歓迎のスピーチ。このあと大妻女大「英語特殊演習」グループの歌、これに応えて各国の研修生からも即興の草笛とピアノ、お国の民謡や踊りなどが披露。最後に全員〝日本語で〟「四季の歌」。

7月18日＝右記外国人日本語教師団を遠来荘での茶会に招待。一行は琴の演奏も添えられた民家で、茶道の体験と奉仕者との交流を楽しんだ。ご奉仕は矢内宗紫先生と六人のお弟子さん。当日は他に大妻女大、中大通信教育スクーリング学生など参加者計九七名。

◆わたしたちの合宿◆

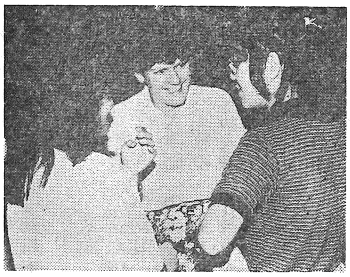
「英語特殊演習」一〇年の成果

大妻女子大学教授　隈部　直光

大妻女子大学の「英語特殊演習」を始めてから約一〇年になる。これは、英文科一学年の学生を、大学セミナー・ハウスに四泊五日カンヅメにして、一語たりとも日本語の使用を禁止し、英語の運用能力、殊に、聞き、話す力をつけようとするものである。このような英語の技能訓練は、週に一、二時間とって行うよりも、集中して行うほうが効果があがるものであるが、大妻女子大のこのプログラムの特長は、専門課程の選択科目として、二単位を与えることである。毎年7月、夏休みに入るとすぐ実施しており、参加者は大体六〇名（これは在籍者の約半数である）、指導は原則として専任教員全員が当たる。

筆者自身、毎年この指導の中心になっているが、セミナー・ハウス利用の最大の長所は、他大学のゼミ合宿が多いため、学生が日常、英語（ずいぶんあやしげな英語だが）を話していても異和感がないことである。合宿の成果としては、英語を話すことを苦にしなくなること。五日間の日程では、二日目の午後から夕方ぐらいが一番のヤマバである。ここを何とか連帯で（というのは、落伍しかけた者を励まし合って）乗り切ると、三日目からは、英語を話すのがぐっと楽になる。テープを流して聞きとることもドリルするが、この進歩が限られているのは、大学生という年頃から、もう耳のほうが固まってしまっているせいかと思われる。ただ「話す力」の測定がなかなか難しいので、テスト結果でこれを証明できないでいるのがもどかしい。

今回はたまたま泊り合わせた海外からの日本語教師団一行と食堂や交友館で、それぞれ相手の国語を使っての交流を楽しむことができ、これが学生たちに予期せぬ思い出を残してくれた。



外国人教師との会話を楽しむ
大妻女子大学生（交友館）

●海外日本語講師研修会

心のきずなを結んだ一週間

①――韓国外国語学院　孫　順　玉

東京に到着した翌日、各国から来た見知らぬ人々と一緒に、またバスに乗って八王子へと向かった時は、とても疲れていて、なんとなく心細かった。

しかし、大学セミナー・ハウスの緑にかこまれた時には、すでに何の長い説明もいらなくなっていた。こんもりとしげった木の葉、その緑は、私達を気楽に素直にしてくれていた。ちょっとした失敗だの、あまえなど、みんな受け入れてくれるようだった。

あちらこちらでの話し声、笑い声、みんなは寝る時間さえ惜しみながら、お互いの心を交わしていた。そこにはすべてを超越した人間の心だけが森と共にいきづいていた。

自然を愛し、その中で安定と秩序をまもって、お茶をたのしみながら相手の心を大事にしている日本人が、心にしみて感じられるのであった。

熱心に教えてくださった先生たちの講義、朝早くから鳴き立てるカラスの声、雨にぬれ、夜霧の流れる森のあたり、交友館でのたのしかったパーティなど、一週間の後はみんないい思い出としてあとに残して立ち去らなければならなかった。

帰り道は、出発した時とは全く違った気持ちで、元気に大きな声で「春を愛する人は……」をみんなが歌っていた。心から、大学セミナー・ハウスの方々に厚く感謝しながら……。

②――ウィーン大学日本学研究所　E・ホルボフスキ

私の母国オーストリアでは、各大学の学生が集まって合宿生活を送りながら勉強できる設備がありませんので、オーストリアの大学生がこのような自然に囲まれて勉学にいそしむ機会がないことを誠に残念に思っております。

今回の研修会に参加した私たち日本語講師は世界各国から参りましたが、国々の風習や国民性の相違を超えた相互理解を大学セミナー・ハウスで持つことができ、これからの研修会が一層楽しく続けられることと確信しております。

お茶席を催して頂いて、くつろいだ雰囲気で日本の伝統文化に接触することができましたとき、雑踏する東京の中心地から来た私は、ようやく心の古里（ふるさと）の日本にたどり着いた思いをいたしました。

雨に降られて、簡素な生活のつらい面をうかがわせられたこともありましたが、それはさておき、研修会参加者同士と日本の各大学生との交歓は確かに一生忘れられない思い出になることでしょう。

交歓会でお国の歌を披露する韓国の日本語教師（食堂）

●利用状況

＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用
日帰り利用者を除く

6月

（68グループ、延三、五六三人）

東京都立大学助教授　古川　勇二
学習院大シェイクスピア劇研究会
東京工業大学高分子若手懇談会
東京都立大学助教授　磯部　力
東京都立大学法学部新入生オリエンテーション
一橋大学教授　山沢　逸平
早稲田大学蛋白質構造理論勉強会
津田塾大学数学科フレッシュマン・キャンプ
駒沢大学講師　羽鳥　茂
千葉商科大学教授　野村　隆夫
東京学芸大数学科新入生合宿研修
東京外国語大学教授　宇佐美　滋
慶応義塾大学長島・森研究室
立教大学教授　水本　浩
成蹊大学助教授　下斗米伸夫
一橋大学教授　竹内　啓一
立教大学教授　三戸　公
東京家政大学教授　宮崎　照子
早稲田大学教授　岡田　純一
早稲田大学教授　西宮　輝明

東京大学教授　今道　友信
東京都立大学教授　桐敷真次郎
明治大学教授　松瀬　貢規
電気通信大物理工学科新入生研修
東京都立大学物理学教室新入生オリエンテーション
東京女子大学教授　福田　一郎
明治学院大学教授　千葉　茂美
東京理科大学教授　沖塩荘一郎
中央大学教授　山下　幸夫
東京農工大学農業技術研究会
東京学芸大学教授　大久保典夫
学習院大学職員研修
東京工業大学助手　樋口　一辰

予告

▼第120回大学共同セミナー
主題　地球の過去・現在・未来
——太陽と環境と生命——
期日　昭和57年12月17～19日
＜全体講義＞
Ⅰ　地球・惑星の誕生と進化
電気通信大学教授　芳野赳夫氏
Ⅱ　物質としての遺伝子——生命の歴史と未来——
電気通信大学教授　野田春彦氏
＜セクション演習＞
A過去の太陽活動と人類の歴史（櫻井邦朋氏）／B現在の太陽活動と地球環境についての研究—オーロラのなぞを解く—（福西浩氏）／C現在および未来の大気—気候問題に関するひとつの試論—（廣田勇氏）／D地球社会の未来と宇宙活動—スペース・コロニー—（大林辰蔵氏）
＜締切日＞12月9日

▼第121回大学共同セミナー
主題　人間の攻撃性を考える
——ヒトの性は善か悪か——
期日　昭和58年1月7～9日
＜ゲスト講演＞
映画監督　篠田正浩氏
成蹊大学教授　朝倉　孝吉
中央大学通信教育部神奈川支部学生会
千葉大学助教授　武蔵　武彦
東京都立大学教授　速水佑次郎
法政大学教授　金山　行孝
東京外国語大講師　伊豫谷登士翁
千葉商科大学教授　金丸　一夫
白梅学園短期大学保育科新入生オリエンテーション＊
都留文科大学講師　横坂　健治
神奈川大学助教授　堀野　定雄
国士館大学助教授　斉藤　忠義
文部省大学局学生課（厚生補導研究協議会）
第4回大学合同セミナー
日本建築学会農村計画委員会
日本看護協会看護研修学校
朝日カルチャーセンター
日本基督教団東中野教会青年会
国際交流サービス協会
京王百貨店＊
多摩中央信用金庫
日本水産＊＊
丸広百貨店労働組合
富士通興業
日本総合研究所
日本電気＊
アイワールド
〔個人利用〕
法政大学総長　中村　哲

＜全体講義＞
Ⅰ　人類学からみた攻撃性
東京大学教授　尾本惠市氏
Ⅱ　人間性の問題と社会科学—ハイエクの文化的進化論を中心に—
東京外国語大学教授　小浪充氏
＜セクション演習＞
西田利貞（動物行動学）、佐藤方哉（心理学）、畑中幸子（文化人類学）、小浪充（社会思想史）の諸氏
＜締切日＞12月22日

▼第5回大学合同セミナー
主題　現代社会と社会学——社会学の可能性を求めて——
期日　昭和57年11月27～29日
＜演習と指導教授＞
A現代家族と社会学—老人扶養問題をめぐって—／B現代日本の社会意識—私生活主義の行方—／C人間の一生とは何か—農村社会を事例として—／D都市と日常生活／E宗教と社会—イスラム教を中心に—▽山岸健（慶応）、田中義久（法政）、正岡寛司（早稲田）、平野敏政（慶応）、藤見純子（早稲田）、渡辺雅子（明治学院）、川崎嘉元（中央）の諸氏

■7月
（98グループ、六、三八二人）
東京都立大学助教授　国井　隆弘
筑波大学教授　白山　和久
津田塾大学助教授　伊藤　俊次
一橋大学助教授　村井　敏邦
法政大学助教授　相田　利雄
共立女子大学教授　藤木　宏幸
学習院大学助教授　菅　忠義
早稲田大学教授　大槻　健
駒沢大学助教授　谷敷　正光
立正大学教授　福岡　克也
筑波大学助教授　榎本　正敏
慶応義塾大学教授　檜谷　昭彦
武蔵大学教授＊　佐野　晃
駒沢大学助教授　石井　修二
東京工業大学教授　永井陽之助
東京都立大学助教授　湯浅　欽史
上智大学教授　水野　一
東京経済大学教授　色川　大吉
お茶の水女子大新入生セミナー＊
東京都立大学助教授　石田　頼房
東京大学教授　高橋　徹
東京都立大学講師　森岡　清志
一橋大学教授　岡庭　武
東京大学教授＊　見田　宗介
芝浦工業大学建築学科八王子ゼミナール　侘美　光彦
東京大学教授　一楽　信雄
武蔵大学助教授　池田　正孝
中央大学教授　井上　勝也
千葉大学教授　鈴木　浩平
東京都立大学助教授　児玉昭太郎
東京都立大学助教授　浦田　賢治
早稲田大学教授　川原　栄峰
早稲田大学教授　馬場　宣良
東京都立大学教授
大妻女子大英文学科英語特殊演習　山下　幸夫
中央大学教授　吉田　夏彦
東京工業大学教授　寺尾　浩明
帝京大学助教授　坂田　長生
東海大学教授　池谷　彰
東京学芸大学助教授　馬場　修一
東京大学助教授　山田　辰雄
慶応義塾大学教授　槇田　仁
慶応義塾大学教授　畑尻　剛
中央大学講師　今富　正巳
中央大学教授　井出　翁
東洋大学教授　武長　脩行
東洋大学教授　則武　輝幸
杉野女子大学講師　樋口　一辰
東京大学助手　長坂　達夫
東京工業大学助手　小島　武司
東京薬科大学助教授
中央大学教授
中央大学通信教育部
明星大学通信教育部
文京女子短期大マンドリンクラブ　林　俊一
獨協大学教授　持田　恵三
和光大学教授
山梨県立女子短期大学助教授　阿部真美子
茨城工業高等専門学校助教授　谷口　昭三
京浜女子大学夏季自然講習会
日本女子大学附属高等学校
明治大学付属中野高等学校＊
第3回核融合研究集会
第3回大学院共同セミナー
イギリス中世劇研究会
大学英語教育学会
朝日カルチャーセンター
阿佐ヶ谷教会
国際交流基金（海外日本語講師研修会）
中小企業大学校
文学教育研究者集団
日本電気＊＊＊
東芝府中工場
沖電気工業
日本トラベノール
丸紅（パキスタン・カラチ電力技術者グループ）
富士電機製造
日本電気コストコンサルティング
日電アネルバ
富士通興業
〔個人利用〕
上智大学学生　福島　範昌
東京大学院生　松本　高志
東洋大学助教授　堀　光男
法政大学　加瀬　義徳
板橋区立赤塚第三中学校教諭　南出　新治
日本ビクター　清水　郁夫
三和銀行　露雪　英雄

●編集後記

10周年記念10大学合同セミナーは、〝大学を開く〟実験が見事に結実した好例であろう。その成果の背後にある熱心な指導教授と学生達の参加意識を、紙面から読み取っていただければ幸いである。

なお、内田義彦先生には病後をおして、セミナーの指導をされたばかりでなく、本号の巻頭原稿までご執筆いただいた。心からのお礼を申し上げたい。（能）